



TITLE:

# ロールシャッハ法の心理療法場面 における適用性( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

河合, 隼雄

---

CITATION:

河合, 隼雄. ロールシャッハ法の心理療法場面における適用性. 京都大学  
, 1967, 教育学博士

ISSUE DATE:

1967-03-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212163>

RIGHT:

【 7 】

氏 名	河 合 隼 雄 かわ い はや お
学 位 の 種 類	教 育 学 博 士
学 位 記 番 号	論 教 博 第 3 号
学位授与の日付	昭 和 42 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	ロールシャッハ法の心理療法場面における適用性

論文調査委員 (主 査) 教 授 佐 藤 幸 治 教 授 下 程 勇 吉 教 授 倉 石 精 一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、わが国においてややもすれば心理療法と心理テストとが背反するがごとく解せられ易かったのに対し、ロールシャッハ法をとり、その心理療法場面における適用性を明らかにしようとしたものである。

本論文は5章よりなり、第3章、第5章は実証的研究である。第1章においては先ずロールシャッハ法の発展過程を、特に臨床的な面にしぼって、歴史的に述べている。すなわち Rorschach の工夫、Schafer の主題分析を中心とする発展、精神分析理論の導入、これらの間におけるジレンマを克服するものとして現在問題とされきた Klopfer らの現象学的な接近法に至る発展を概観している。次にわが国において特に問題視される診断と治療の対立性をとりあげている。わが国のカウンセリングをする人は多く、Rogers の立場によっており、その診断無用論の影響を受けている事実に対し、Rogers 説の歴史的文化的背景についても考察を加え、無批判的な導入の危険性を論じている。終りに、ロールシャッハの診断は、自我機能を知る点に重点があることを指摘し、これから得られた自我構造の知見を参考にして、予後判定の点についても、ロールシャッハ法が有用と考えられることを論じ、序論としている。

第2章（自己実現の過程とロールシャッハテクニック）においては、最近の自我心理学の発展によって明らかにされてきた自我機能と、Jung の自己実現の考えとを基礎として、心理療法の目的としての自己実現の過程を、Klopfer の考えを参考にしながら概観し、それとロールシャッハ反応との関係を論じている。次章のロールシャッハ法の心理療法場面における適用性の理論的背景として述べたものである。

第3章（心理療法とロールシャッハテクニック）においては、ロールシャッハ法を用いて、心理療法の予後判定や、効果の測定を行った今までの研究を概観し、ついで森田療法を受けた患者39名（神経症35名、精神分裂病4名）について、Klopfer のロールシャッハ予後評定尺度（R.P.R.S.）を試み、退院後の状態との関係を検討し、さらに34名の神経症患者について治療前と治療後のロールシャッハ法を施行、治療者による判定との関係を細部にわたって検討している。

第4章（現象学的接近法）においては先ず臨床心理学における現象学的立場をとる Jaspers, Rogers などの人びとの見地を比較検討しつつ、Klopfer の考えに従って、観察者が、自分の観察を記述するにあたり、ある程度の枠組をもつことは避けられず、最近の研究は客観的事実との関連についても主観、客観を通じてのある型の現れを把握しようとする方向にあるとし、ロールシャッハ法に対しても現象学的な接近法が可能である、また有用であると論じている。

第5章（事例研究）においては、現象学的接近法の一つの例として、9才の不潔恐怖症児童の治療において、その前後にロールシャッハ法を施行し、テストで得られた反応語を刺激語として、言語連想検査を併用し、これに分析心理学的解釈を加え、児童の内的枠組からの接近を図り、心理療法の過程を内面から追及している。筆者はこれを以て診断と治療の関連に対する第二の証明としているのである。

### 論文審査の結果の要旨

Rogers の影響の下に心理診断と心理治療とが背反するかの如き見解がわが国において支配し易かったのに対し、筆者はロールシャッハテストをとり、森田療法の患者に対する Klopfer のロールシャッハ予後評定尺度の適用性と一恐怖症児童の内面への接近についてのロールシャッハ反応語の活用との両面から、心理診断の心理治療に対する有用性を証明しようとし、これに成功している（第3章、第5章）のは筆者の中心的な業績であって高く評価してよい。他はこれに対する理論法並びに他学者の研究の背景を論じて本研究の意義を明らかにしたものである。

筆者は第4章の現象学的接近法において、その理論的枠組が「Klopfer の流れを汲み、ユング派の考え方を基礎とし、自我心理学の方法を借りたもの」であると述べているが、これは筆者の立場をよく現わしている。第2章における「自我心理学の発展」と「Jung における自己の概念」においては、広く自我論を展開したわけではないが、しかし最も重要なものの一つである Rogers の自己の概念にもふれ、それらに通ずる、人間内部の成長可能性に注目し、これを心理療法における中核とした点を取りあげたのは、臨床家としてすぐれた重要な知見である。序論、第3章等において米欧の文化と日本の文化との相違が心理療法の導入において無視し得ない問題を生ずることを指摘して、日本の心理治療家の陥り易い過誤を指摘したことも、筆者の欧米における生活経験を生かした貴重な成果である。第4章の現象学的接近法の考察は、その歴史的叙述等においては筆者の基礎心理学的教養の不足が見られるとしても、Klopfer に従って臨床関係における現象学的接近法の構造を分析した点、米欧における現象学的接近法における夫々の文化を背景とする相違に注目した点などには、また筆者のすぐれた知見を認めることができる。

第5章、不潔恐怖症の9才児にロールシャッハ法を適用し、テストで得られた反応語を刺激語として連想検査を行い、これに分析心理学的解釈を加え、治療に伴う児童の内面生活の経過を追跡した事例研究に見られる、筆者の臨床家としての着想と技能には極めてすぐれたものがあり、高く評価すべきである。しかしその解釈の根拠についての説明は、筆者自身にとっては自明に近いことであるとしても、表現にはなお十分とは云い難いものがある。

これを全体として見るとき説明や論述の十分でない点が若干残されてはいるが、本論文は、筆者が1年半 UCLA の Klopfer のもとに留学して、親しくロールシャッハ法の指導を受け、さらにスイスのユン

グ研究所に留学して2年半分析心理学技法を修得して帰国，これらの修業を中核として，その前後約10年にわたって臨床経験を重ねてきた多年の研鑽の結晶であって，わが国の臨床心理・教育臨床の領域における得難い独自の業績であり，重要な寄与をなすものといってよい。

よって本論文は教育学博士の学位論文として価値あるものと認める。